所沢市域の地理学的考察

——とくに都市化に伴う諸現象と地域分化について——

鈴　木　美知子

首都東京への人口と機能の集中傾向は，その反作用として周辺都市への拡散をおこし，周辺都市が大東京の影響下に大きく変容するのは首都圏に共通の現象である。武蔵野台地北西部に位置する所沢市も，大東京の衛星都市として近年大きく変容してきている。

71.84 km²の面積と良好な交通条件は，東京の北西郊としては比較的早期の開発を可能ならしめ，日本住宅公団新所沢団地造成を契機に，新所沢地区を新規開発の核として，住宅地の農地蚕食が進行してきた。この時期が，経済の高度成長期に当っていたため，全国各地から首都圏に職場を求めてくる転入者の増加は著しく，市街地の拡大は周辺部の農業を脅かしてきた。その結果，高度成長経済に対応し得ない低生産性の小規模農業経営層の離農，兼業化が促進され，残存する零細規模農家と企業化に成功して規模拡大を進める大規模経営農家の両極分解の段階に入っている。

人口の急増は各地に少なからぬ影響を与え，地区毎に異なる歴史的基盤の上に様々な展開を見せている。古代より周辺の村の核であった旧町地区では，住宅都市の初期に地区内の充塡が進み，現在では飽和状態を呈し，政治・経済機応の集中傾向と共に首都圏での都心部の構造に対応する構造を示す。この旧町を核として周辺部に住宅地域が拡がり，住宅地と農村的景観の混在した漸移地区を経て農業地帯へと移行する（旧町の北部に，旧町の1.5倍の面積をもつ米軍基地が存在して市街の北方への発展を妨げたことや，開発の古い南西部と歴史の新しい北東部では農業の基本的条件が異なることなどから，同心円構造にはなり得ない。）

歴史の古き故に，農地分割が進み自給自足体制の崩壊と共に，兼業化を余儀なくされた南西部に住宅地化が進展したとき，その景観は平坦な畑地に拡がった宅地ではなく，小規模な農地中に農家と一般住宅が混在する形状を呈し，農村的色彩を残しながらの非農業地帯を形成している。この南西部と旧町を隔てて対称の位置にある北東部は，広い農地と専業大規模経営により高い生産性をあげている優良農地域で，殆どが市街化調整区域に入り，社会状勢の変化に応じ，換金性の良い蔬菜栽培や畜産を大規模に経営している。基地北部には大規模な住宅開発が進められているが，まだ北東部地域全体的な傾向とはなり得ない。高密度市街地である旧町と新所沢地区の周辺に拡がる市街

地には，幾分農村的景観も混じるが，新興の住宅地であるために，新規転入者つまり東京方面に職場を持ち，夜間だけ市民となる多くの人々を収容している。

所沢市は，近世までに地方の小中心都市として栄えた旧町の基盤を核に，戦後の東京への人口集中の反作用としての転入人口の増加により，次第に住宅都市的性格を強めてきた都市である。その都市化は各地区で複雑な展開を見せ，全体的に都市的職業従事者の増加や，各地区の市街地の増大をみながら，次第に土地に密着した農業と対峙して内容を変化せしめ，今日の態様を形成してきている。首都圏の都市化の一典型とも言える所沢の変容の今後に興味が持たれる現在である

甑　島

－過疎に伴う地域構造の変化－

田　中　千津子

甑島は鹿児島県の西方４５Kmの地点にある離島である。古くから農業と漁業を行ってきた。しかし戦後急激に人口が減少してきた。昭和２５年には２４,７４４人であった人口が昭和４５年には１１,７５０人と半分以下になってしまっている。その結果，深刻な過疎現象をみるようになった。

甑島は全島が山がちであるために耕地に乏しく，ほとんどが階段耕作である。また台風の常襲地帯でもあり，強い西風を受けるので栽培する作物が限定されている。畑作のほとんどは甘藷である。そしてわずかな沖積地に米をつくっている。島においては長い間，甘藷が主食であった。しかし戦後は米を主食とするようになった。このことは食糧の自給ができなくなったことを示しており，かといって適当な商品作物も見当らない。その結果，ほとんどの段々畑は耕作を放棄されてしまっている。今，島においてもっとも注目されているのは，肉牛の肥育を主とする畜産である。またピンク色でかのこ状の斑点をもつ「かのこゆり」は明治時代からその球根を輸出しており，現金収入を得る手段であった。しかし現在かのこゆりの生産はあまり伸びていない。島の農業を阻むものはなんといってもその零細性である。また農業従事者は老齢化しており，兼業農家率が高い。

甑島の漁業は，戦前まではいわしやかつおなど暖帯性の回遊漁に恵まれており，盛んであった。しかし戦後は大資本に押されて，ふるわなくなってしまった。甑島の動力船はほとんどが３トン未満である。